

2025年度 大分ケーブルテレコム株式会社 放送番組審議会 議事録

開催日時：2026年2月24日(火) 16:00～17:00

場 所：大分ケーブルテレコム株式会社 1階会議室

出席者：放送番組審議委員 5名中3名出席 ※敬称略、順不同

《委員》

渡邊 教和 (大分トヨタ自動車株式会社 代表取締役社長 (CEO))
高橋 淳子 (大分市教育委員会人権・同和教育課 参事補)
三島 康典 (社会医療法人 三愛会 理事長)
大野久美子 (大分市企画部広聴広報課 参事補)
小島 康史 (NBU日本文理大学 工学部 情報メディア学科 教授)

《放送番組審議会事務局：5名出席》

小森 智幸 (代表取締役社長)
小野まゆみ (メディアコンテンツ本部 本部長)
高橋 康史 (メディアコンテンツ本部 副本部長)
渡邊 寛章 (メディアコンテンツ本部 副本部長)
利光 健 (メディアコンテンツ本部 コンテンツ制作グループ)
堤 佳菜子 (メディアコンテンツ本部 メディア営業グループ)

1、開会挨拶 (渡邊副本部長)

2、社長挨拶 (小森社長)

3、メディアコンテンツ本部概況報告 (小野本部長)

4、議題審議 ～赤瀬川原平 没後10年特別番組～「赤瀬川が大分に残した軌跡」

1) 特別番組「赤瀬川が大分に残した奇跡」ダイジェスト視聴

ディレクター：本番組では、大分で赤瀬川源平氏の遺志を受け継ぐ人々の活動を追い、氏のルーツと人物像を掘り下げた。特に、幼少期を共に過ごした親友・雪野恭弘氏のメディア初インタビューは、核心に迫る重要な要素となった。また、赤瀬川氏が名付けた「トマソン」を巡る大分路上観察学会の活動や、「白衣清掃パフォーマンス」に影響を受けた市民グループの取り組みを通じて、大分に息づく赤瀬川氏の存在を描いた。

2) 番組視聴後 審議・意見交換（進行：大野委員）

委員：番組を通じて赤瀬川氏の存在を初めて深く知ることができた。資料映像や解説が丁寧であり、芸術家としての側面と地域とのつながりが視聴者にも分かりやすく伝わる構成だった。視聴者が「自分も探してみたい」と感じられる内容である。

委員：地域にゆかりのある人物を取り上げた点が良い。こうした切り口は地域メディアならではの強みである。今後も継続的に人物ドキュメンタリーを制作してほしいと考える。人物の選定・着眼点が興味深い。地域ゆかりの人物を継続的に取り上げてほしい。

委員：編集・まとめ方が秀逸で、インタビューの引き出しも良い。特に、清掃シーンのオーバーラップ表現については視聴者の心に強く訴える演出。さらに最後のまとめ方が優れており、ゲストコメントの質も高い。トマソン紹介は視聴者の興味を引く良い工夫。改善提案として、冒頭ナレーションの表現（「一人の男がいた」）の時代適合性、女子学生のトマソン紹介の冗長さ、雪野氏の本を用いた場面転換、原風景（大分での生活）の掘り下げ不足を感じた。

5、ドキュメンタリー制作への提案・意見

委員：若年層の視聴者を増やすため、地域で挑戦する若者や起業家を追う企画、SNS 連動した参加型の番組進行など、新たな層にアプローチする番組案を提案する。

委員：全国で活躍し始めている大分出身者への密着企画も地域視聴者には需要が高い。若い力士など、成長を追いかけるストーリー性は視聴者の共感を得やすい。

委員：価値観が多様化する中で、指導者や教育者がどのように変化に向き合い、どのように若者を育てるのかというテーマは、地域性を生かしたドキュメンタリーとして強い可能性を感じる。指導者のあり方や現場の工夫に焦点を当てた企画はケーブルテレビの強みを生かせると考える。

6、ケーブルテレビ全般への意見・要望

委員：花火大会や祭りの中継は会場に行けない視聴者にとって価値が高い。特に高齢者から好評であり今後も継続を望む。

委員：「友チャリ」のように一般市民が出演する番組は、地域との距離を縮める上で有効であり、継続的な制作を期待する。「身近な人がテレビに出る」ことの喜びはローカルメディアの大きな魅力である。

委員：大分夢花火の高視聴率は地元コンテンツへの期待の高さを示している。

事務局：ドローン映像は今後も活用。花火大会の全編放送はケーブルテレビの強み。観光協会等からの二次利用ニーズに対し、著作権は原則発注側へ譲渡済み。今後は活用方法の提案を強化。

6、閉会

多数の意見・提案を今後の番組制作に活かすことを確認し、閉会

